





私は津島を伝える。災害が起きたとき、津島が海拔ゼロメートル地帯にあることを思い出す。しかし、災害が起きたときではもう遅い。私たちは災害が起こる前に行動を起こす必要がある。津島固有の歴史や伝統文化、そして海拔ゼロメートル地帯という津島固有の問題を伝えていく。日常と非日常の相反する事象の繰り返しの中に、津島を知ること、忘れないための「みちしるべ」を建築で創造し、災害に強い津島型住宅モデルを提案する。(堀田和史)

#### 【審査委員講評】

##### 難波和彦審査委員長

津島市の観光の拠点である本町筋を選び、仮設用鉄骨部材を組み合わせることによって、既存の建物を耐震補強しながら、ライフラインやバリアフリー通路や藤棚や祭りの見学場所といった様々な機能を持った「道標」を作り出そうとする提案である。魅力的なシーケンスを生み出そうとする魅力的なヴィジョンだが、技術的な裏付けが弱い点が惜しまれる。

##### 朝岡市郎審査委員

おそらく津島のことを一番良く知った提案であり、年に数回の祭り、過去の水害時の避難の方法、そして津島の格式ある家並みを保存するだけでなくにぎわいを取り戻すとともに災害時に対応できるまちなみが提案されている。

##### 生田京子審査委員

中心市街に、新たに足場の逃げ道と船を挿入することで、浸水に対する備えを意識化させる提案です。どのような形で足場が挿入されるのか、平時にはその足場がどのように活用されるのか・・・など、夢が膨らみます。構想段階に留まらずに、具体性をもって詳細が示されると、より魅力的な案となったでしょう。

##### 川崎浩司審査委員

津島市の本町筋にある既存の住宅街に仮設のポールとボードを設置することにより、水害に対する避難場所だけでなく、祭り時には憩いの空間をもたらし、津島市の歴史を生かしたまちづくりを提案している。

##### 清水裕之審査委員

とにかく、二次審査までのブラッシュアップを期待していた。おそらくどの審査員も同じ思いだったのであろう。少なくとも本町という具体的な場所を扱っているのであるから、足場と耐震ポールがどのように取り付き、日常的な景観としてどのように見え、かつ機能するのかを具体的に示して欲しかった。アイデアコンペとはいえ、やはり、現実的な対応も期待されるコンペであると理解して欲しかった。

##### 日比一昭審査委員

日常生活の中で「津島を伝える」、それは歴史・文化だけでなく海拔ゼロメートル地帯という固有の問題まで含めて伝えていくというコンセプトは、大変興味深い。そして、その具体的対応として「足場」「耐震ポール」「船」を「津島のみちしるべ」にするという着想には大いに期待していた。が、プレゼンテーションにおいてその実現性、デザイン性、構造的根拠などが未消化なままであり、とても残念であった。応募者の今後の可能性に期待したい。